

どうする？

- ① 片耳パーティを殺し、ドレイルの願いを叶える。
- ② ドレイルにはこのボートから降りてもらい、片耳パーティを助ける。
- ③ ふたりともボートに乗せたままで和平を保とうと務める。

野外

ドレイルとパーティの両方を昼夜見張り続けるのに、途方もない労力を強いられた。それでも最初の数日は何とかやり遂げたはずだが……。

東へ航海を続けて5日目の午後。船室で黙って皆で食事していると、いきなりドレイルがせき込み、嘔吐した。どんどん悪化し、とうとう血染めの床にひざまずいた。何とか助けたかったが、何もできなかった。断末魔の吐血と共に、床に崩れ落ちた。

ドレイルは死んだのだ。パーティを見上げると、満足げに傍らに佇んでいた。

「おい、そんな目で見るとなよ。こいつは、あいつか俺かのどちらかにいつか起こり得たことさ。警告しただろ、選べって。だがお前らはそれを拒絶した。だからこの俺が、お前らみんなのために選んでやった。感謝してくれていいんだぜ」

選択 A： 状況を受け容れてこのままパーティと航海を続ける。

選択 B： 自分たちも毒殺される前にパーティを放り出す。

m6

選択肢: パーティを放り出す

目的: 敵の全滅

序幕:

諸君は確固たる意図をもってパーティを取り囲んだ。すると視界がぼやけ、膝から力が抜け、自分を中心に船室が回りだした。

「哀れなり」パーティはため息をついた。「もしかしたら『ずっと一緒にやってけるかも』と淡い期待を抱いてたんだがね……ここに全員分の解毒薬がある……だが、あのくそったれなクワトリルのせいで、お前らの判断力は鈍っちゃったようだ。これじゃあ俺は、危ない橋なんか渡れねえよ」

視界が端から徐々に白み、意識が遠のくなか、パーティの音が響く。「心配すんな。致死毒じゃねえよ。誰が儲けのネタを、ふいになんかするものかよ」

意識を取り戻すと、干し草の山を寝床に、うつ伏せに倒れていた。頭にずきずきと痛みが走る。起き上がろうとしても、疲労と足首にはめられた鉄かせのせいで、ろくに動けない。鉄の檻と、硬い石の床。どうやら牢獄に入れられているようだ。うめき声を上げ、何とか座ることができたところで、誰かが近づいてきた。

「おおう、いま行くぞよ」でっぴりと肥えたオーキッドが、檻越しにじっと見つめてきた。「あんなゴロツキの嘘つきでも、真実を語ることはあるわけか。わしとしては、あんたらは二度目覚めぬとばかり思っていたが、《神託者》はあの密輸人の解毒薬を信じた」

オーキッドはかんらからと笑った。体表の紫の鱗であっても、その皮下脂肪を押しえこむことはできていない。「あんたらはととても強い、と同時にとても愚かだ……とパーティは言っていたな。《神託者》に対する、何がしかの慰みになるとよいのだが」

「よく休むがいい。初陣は明日よ」

オーキッドは歩み去った。その薄暗い檻のなかで身を固くして、どのくらいの時間が経過したのか、ここはいったいどこなのかと考え、一日を無駄にした。無限のような時が過ぎ、例の太ったオーキッドは、とても長い幾本もの鎖を引きずりながら戻ってきた。

「さあて、あんたらの出番だ」彼は言った。「特別な舞台をお膳立てしたのだから、あまり早く死んでもらっては困る」

そこで溜めて、こちらの反応を見る。「すぐ死にたいなら、わしに殴りかかるか、逃げてみるがいい。名誉の死とは言えんな。今からひとりひとりの檻に入って、順番に足かせに、この鎖を繋いでやろう。その鎖をたどれば、裏口から闘技場の控えの間に出る。武器はそこに用意してある。そこで準備を済ませたら、いざショーの始まりだ」

従うほかはない。オーキッドの命ずるまま、控えの間で武装を整える。歓声と怒号が大波のように飛び交い、闘技場への扉を震わせている。どよめき中から、ひときわ大きく誰かの声が上がったが、耳を澄ませたとたん、扉が勢いよく開け放たれた。

目の前には円形闘技場があった。中央は血で染まり、骨と損壊された遺体が散乱している。見下ろすように取り囲む観客席では、数百体のオーキッドが声を上げている。状況を把握する猶予もなく、そこには大きな熊が待ちかまえていた。その巨軀は真新しい傷口と古傷でいっぱいだ。とてつもなく怒っている。

特別ルール:

この洞熊は《鬼熊》です。シナリオ・レベルよりも2レベル高いものとします(上限は7レベル)。HPは(H×C)/2(切り上げ)で、Hは洞熊(上級)のHPを示しています。2人ゲームでは攻撃+1、3~4人では攻撃+2です。《鬼熊》が倒れたラウンド終了時、①を読んでください。

使用する
地形タイプ:

M1a



洞熊



八つ裂き
ドレーク



唾吐き
ドレーク



石の
ゴーレム



負傷の
罠 (x2)



石柱
(x4)



観衆は息を呑んだ。あまたの傷に屈し、ついに熊が地面に倒れ伏したのだ。諸君は安堵のため息をついた。見やると観衆は感銘を受けているようすだ。すると日除けの下から白いロープの小柄な女オーキッドが身を乗り出し、こちらを睨みつけた。その凝視に魂の奥まで貫かれた。

「更なる相手を」それだけ言って再び席に着いた。

観衆は再度息を呑んだ。闘技場の周壁の檻が開かれ、死へと誘う竜族が解き放たれたのだ。

特別ルール:

八つ裂きドレークが各 a に1体ずつ(計2体)、唾吐きドレークが各 b に1体ずつ(計2体)発生させます。2人ゲームなら全て通常モンスターです。3人なら八つ裂きドレークだけが上級モンスターに、4人ゲームなら全て上級モンスターになります。最後のドレークが倒れたラウンド終了時、②を読んでください。



最後の敵を撃破すると、観衆の溜息は喝采に変わった。再びロープのオーキッドが姿を現し、こちらを見下ろす。

「更なる相手を」彼女は命じた。「《博士》の最新の研究成果を、ここに」



未知なる世界へ7: 鎖の捕縛

観衆はすぐさま静まった。ローブのオーキッドの背後のあたりが、どよめいた。すると足元で地面が揺れ、闘技場中央からの爆風が諸君を後退させた。

土煙が晴れると、地面にぽっかりと開いた穴から、大きな影がのっそり立ち上がってくる。石と金属で出来たゴーレムが、こちらを見下ろしていた。

特別ルール:

各キャラクターと召喚獣は、手番終了時に2ダメージを受けます。これはシナリオ上の効果です。

この時点で **C** およびその各隣接ヘクスにいるキャラクターと召喚獣には畏ダメージを与え、**C** から2マス先まで押し出してください。またこれらのヘクス上にあった上書きタイルは、全て除去します。

C に石のゴーレム（上級）を発生させます。これはロケット・ゴーレムです。シナリオ・レベルよりも2レベル高いものとします（上限は7レベル）。HPは $(H \times C) / 2$ （切り上げ）で、Hは石のゴーレム（上級）のHPを示しています。加えて射程は“-”ではなく4となります（ただし行動順位83の能力カードは隣接攻撃のままとします）。ロケット・ゴーレムの攻撃を受けたコマに隣接する、そのコマの各仲間も、それぞれ2ダメージ受けます。

終幕:

ゴーレムの発する灼熱も、ついには色褪せた。今度は諸君がローブのオーキッドを見上げる番だった。次に何を言い出すのかと考えると身震いを禁じ得ない。日除けから出てくる彼女を目にして、拍手喝采の観衆は、再び静まった。

「戦闘の良い手本であった」彼女は宣告した。「存分に楽しませてもらった。今後の慰みのために、こやつらを元の檻に戻しておけ」

足首の鎖が強く引かれ、控え室の扉まで引きずられる。殺されるまでこの牢屋で見世物になり続けるなど、真っ平ごめんだ。だいぶ弱ってはいたが、今こそ脱出の好機に違いない。

報酬:

各人チェックマーク✓2つずつ
アイテム091番〈鋼鉄の指輪〉